



取り間違えられた火山噴火図

—— オランダ商館長が紹介した 1783 年天明浅間山噴火絵図 ——

北原 糸子（非文字資料研究センター 研究員）

夏休みを利用して今年イギリス、オランダに行った。目的は災害資料の調査であったが、日本災害絵図の研究をしているロンドン大学大学院生の案内でイギリスでは所定の成果を収めることができた。オランダは以前にシーボルトの資料調査のため、ライデン大学に行ったことがあったので、ハーグのオランダ国立公文書館は始めてであったが、外国からの閲覧者に対しても開かれた対応がなされていて、難なく資料を探し当てることができた。ここで調査してきた絵図を紹介したい。

調査した絵図はオランダ国立公文書館所蔵にかかる天明浅間噴火の絵図である。この絵については、論文「ティツィング『日本風俗図誌』（1822）掲載の二点の火山噴火図について」（『歴史民俗資料学研究』13号、2008年3月）を公表した。しかし、論文執筆段階では原画を見ていたわけではなかったので、今回は原画をみる目的でオランダに出かけたというわけである。

間違っ て掲載された噴火図

なぜ原図をみるが必要になったのかというと、ティツィング (Isaac Titsingh 1745~1812) の死後、*Illustrations of Japan* (R. Ackermann, London, 1822) に間違っ た解説が施され、その間違いが正されることなく、沼田次郎訳『ティツィング日本風俗図誌』（雄松堂出版、1960年）にも踏襲されているからである。間違いだという指摘はすでに松井洋子氏が行っていた（「ティツィングの伝えようとした『日本』」横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本』〈吉川弘文館、2005年〉）。

どのような間違いかという、掲載されている2点の噴火図は両方とも1783年浅間山天明噴火を描いたものであるにもかかわらず、1点は確かに浅間山天明噴火を描くものと正しく解説されているが、もう1点は10年後の1792年に噴火した雲仙普賢岳の噴火図と解説されているからである。

1783年浅間山天明噴火図についても、1792年雲仙普

賢岳噴火図についても少なからずの絵図が残されており、その多くを見てきた者として、当初はこの間違いに気付かず、新しい雲仙噴火図が出てきたのかと期待もし、また、大いに惑わされた。どうみても、雲仙普賢岳の噴火を描いたものとは思えないものが普賢岳噴火図とされていたからである。気付いてみれば、2点とも浅間山天明噴火を描く図であるにもかかわらず、そのうちの1点が雲仙普賢岳噴火図と解説されているのだから、おかしいと思うのは至極当然なことなのであったのだ（図版1、2）。

ティツィングは1779年以来3回来日し、丁度第2回の来日中に天明3年（1783）浅間山噴火が起きている。噴火当時その情報を得たか否かは不明だが、翌天明4年にも来日、通算3年8ヶ月の日本滞在であった。この間に日本に魅せられた研究の成果が『日本風俗図誌』である。4年に満たないほどの滞在であったが、その後も長崎の日本通詞たちとの書簡による交流を通じて情報を得、着々と日本研究の実を挙げていたという。

『日本風俗図誌』中に口絵と本文に解説の付されたこれら2件の噴火については、いずれにしても、見聞記録などからの2次資料に基づいた記述であるから、そうした誤りも起こりうるだろう。

浅間山天明噴火の北麓と南麓の被害

しかし、どうしてそういう間違いが起きたのかということには多少やむを得ない事情が別にあると推定されるのである。というのは、天明浅間山噴火の様相に関わる問題がある。

天明浅間山噴火は周知のごとく天明3年7月初旬大噴火を起こし、北の山麓にあった鎌原村を火砕流が襲い、村人500人ほどを一気に呑み込むという悲劇が起きた。そればかりではない。火山泥流が吾妻川に流れ込み、流域村々の田畑や家押し流し、利根川へ流れ込んだ。この災害では1500人ものが犠牲になった。浅間山北麓



図版 1



図版 1 浅間山噴火図〈南麓〉
東京大学史料編纂所蔵

図版 2



図版 2 雲仙噴火図（実は浅間山噴火図北麓）
東京大学史料編纂所蔵

は火山泥流による被害で大きな打撃を受けたが、南麓の中仙道周辺村々は降灰量が大きかったものの、軽井沢宿では火山弾による火災が起き、若い人が犠牲になったこと以外は北麓のような大被害とはならなかった。当時の絵図にも北麓と南麓の違いはくっきりと描かれている。したがって、事情を知らない人からみれば、同じ山の噴火図とは思えない図となる可能性が十分にあったわけで

ある（図版3、4）。

そのうえ、ティツィングの生前にはこの著作は公刊されるまでに至らず、松井氏によれば、フランス語から英訳を試みたレミュザという人物によって10年を隔てて発生した浅間山と雲仙普賢岳噴火の解説図についての取り違いが生じたとされている。

図版 3



図版 3 「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」群馬県立歴史博物館蔵

絵図で伝える災害、文字で伝える災害

災害が発生すると、それらを絵や図に描いたものは天明浅間山噴火に限らず、数多く残されている。江戸時代、かわら版による災害情報が盛んに摺られるようになるのは、ほぼこの天明浅間山噴火が起きた18世紀の後半である。こうした大量に生産された摺り物の場合、なお一層現在に伝えられているものの数は多い。もちろん、災害の発生を前提にした話であるが。しかし、かわら版などの摺り物類は先にみた描かれた絵や図とは異なり、摺り物として刻まれた絵や図は相当程度簡略化され、被害情報は詳細なものから簡単なものまで種々さまざまではあるが、概して一般的な記述に尽きる。これは要するに受け手が異なるからである。描かれる絵や図は多かれ少なかれ想定される受け手が特定されていて、その受け手に伝えたいなにかを描く、説明するための絵や図である。一方、大量の摺り物は商品として売られるのだから、特定される受け手はいない。だから、その災害の特徴的なポイントが摘記されるということになる。

因みにティツィングの『日本風俗図誌』では、浅間山噴火当時日本に滞在していたから、江戸から情報を得たとして浅間山噴火の被害について解説し、絵図を添えて伝えている。その原図の推定はしてみたものの、確たる証拠は探せなかった。しかし、雲仙普賢岳の噴火当時すでにバタバヤに滞在していたティツィングはこれらの情報を後任の長崎商館員あるいは日本の通詞たちから書簡を通じて得たのだろう。実際、雲仙普賢岳噴火では長崎商館の建物も震動で壊れたりしている。雲仙噴火の場合のこうした情報ルートから察すると、あるいは雲仙普賢岳噴

図版 4



図版 4 「信濃国佐久郡浅間嶽之図」長野県大澤酒造民俗資料館蔵



火の絵図を遠くバタビヤにいたティツィングはそもそも入手していなかったのかもしれない。

つまり、ティツィングではなく、フランス語から英訳した人物は、2点の全く様相の異なる噴火図をみて、それぞれ異なる噴火の絵図と考えたのではないだろうか。彼編集者は、2点の噴火図がそれぞれ本文に解説されている浅間山噴火と雲仙岳噴火にあたると考えて、口絵に載せたと推定される。日本文字の読めない人にはいくら解説がかかれていても、それを読み取ることは不可能だからである。

オランダ国立公文書館が所蔵するティツィングの手稿のなかに挟まれていた原図をみると、「信州上州両国村数凡九拾余ヶ所焼亡流失並土下死亡不可測」と書かれ、山、川、村、城郭などの日本字の説明があちこちに付けられているのであるから、多少は日本文字を解したティツィング自らが編集したのであれば、間違いは生じなかったであろう（図版5）。

こういう次第で、わたしはこの原図の多数の日本文字をみて、漸く間違いの筋道が納得できたのである。

それにしても、噴火図はティツィングが得た当時のものよりかなりの程度に誇張が施された絵図となって口絵に登場した。この作為が原作者か翻訳者かどちらによって成されたのかは今のところ、わたしには分からない。しかし、図1の誇張された噴煙、図2の山々全体が噴火したように色づけされた様相は、ある種の噴火の既成概念が刷り込まれていることは疑いない。この絵は日本から外国へ渡り、編集のためとはいえ、写し回されたものとしてよいとすれば、この間に実態よりもさらに大災害として印象付けられる絵柄に塗り替えられていったものと推定できる。

しかしながら、こうした傾向は災害メディアに関しては時代や地域を超えて存在するといえるのではないだろうか。

図版 5



図版 5 ティツィングの手稿のなかにあった浅間山噴火図 オランダ国立公文書館蔵